

## 創刊のことば

学長 丸 山 忠 孝

東京基督教大学紀要は、『キリストと世界』と命名されて創刊の運びとなった。神学部単一の神学大学ではあるが、伝統的な神学科のみならず国際キリスト教学科を併置して、国際化時代に挑戦しようとする新大学の理念に相応しい名称であると思う。大学のモットーである「キリストがすべて」(Παντα Χριστος)は、新約聖書のことば「キリストがすべてであり、すべてのうちにおられる」(コロサイ3:11, 新改訳)からの抽出である。このことばの前半部はキリストの究極性を宣言し、後半部は世界におけるキリストの遍在を証言する。キリストという集約点と世界という広がりの方がこの紀要の視野にあると言えよう。

『キリストと世界』は、神学大学における信と学、信の深まりと学の広がりとの総合を目指すものと言える。「信は人を深くし、学は彼を闊くす。信なき学に熟なし。学なき信に光なし。」とは、日本を代表するキリスト者・内村鑑三のことばであった。

『キリストと世界』は、使命、教育の特色、将来の卒業生の働きなど新大学の实態の諸相を反映するものでもあろう。17世紀の清教徒神学者ウィリアム・エイムズが「神学とは神に生きること」と定義したように、神学科と国際キリスト教学科は、キリストを宣言し、キリストにあって世界に奉仕することにおいてキリストに生きることを目指す。紀要は新大学の生きたあかしである。

ここに『キリストと世界』は今世紀末の世界に、未知の世紀を間近に展望しつつ誕生した。国家・社会体制の大変動、大規模な近代戦争、価値観や歴史観の転倒などによる混乱の中で新秩序を探りつつある世界である。もとより、紀要はこの世界に蒔かれた一粒の麦、その思想の大海に落ちた一滴の生命に過ぎないが、新大学に託された使命を身に帯して、多くの花を咲かせ、実を結ばせるものであることを期待したい。

〔論文〕

## 神学大学の理念

丸 山 忠 孝

東京基督教大学は1990年4月に、神学部単一の神学大学として設置された。しかも、伝統的な神学科に加えて、新たな試みとして国際キリスト教学科を併置して、一学部二学科の神学大学としての出発であった。神学大学の理念に関しては、先進の諸大学で究明されたことではあるが、ここに新設大学との関連で新たに一考を加えることとする。限られた紙面でもあり、神学大学ということばが持つ本来の問題（「エルサレムとアテネと」）、キリスト教の歴史における神学大学の問題（「神学と大学」）、新設大学との関連での個別的課題（「神学大学の理念に向けて」）の三点のみに言及する。

### 1. 「エルサレムとアテネと」

（1）そもそも神学大学ということばにおける「神学」と「大学」とは本来、水と油のように相合わないものではないか。十字架の福音を中核とする神学と人間の知恵の殿堂としての大学とを結合することは自家撞着に他ならないのではないか。使徒パウロのことば（Iコリント1章）を借りるなら、知恵を追求するギリシャ人には愚かでしかない十字架の福音と彼らの知恵とは相対立するものではないか。神学が万学の女王として諸学に君臨した中世ヨーロッパならいざ知らず、大学が世俗化された国家、社会の中にある今日、福音宣教を担う教会の学である神学と高い公共性を持つ大学とは本来馴染まないものではないか。これらの間は決して枝葉末節ではなく、信仰の本質を問い、また、学の本質を問う者が直面するものであろう。まさに、紀元2世紀から3世紀にかけて活躍した護教家テルトゥリアヌスが、当時の信仰の都エルサレムと学芸の都アテネとを引き合いに出して、「エルサレムとアテネと何の関わりあらんや」

（『異端者法廷準備書面評定』7章）と叫んだことにも通じるものである。

（2）このように「神学」と「大学」が相容れない性質であるだけでなく、近世の高等教育の潮流に関して言えば、指導的教育理論は神学に対立し、その影響から離脱しながら、「過去の遺物としての神学」を否定的に見なして来たのではないであろうか。事実、近世の思想家は神学を中世的・神中心的であり、基本的には来世の幸福に備えるための学問と見なし、それに対して、人間の生のリアリティーを学ぶことを学問とする人間中心的・現世的教育論を展開した。J. ロックの『人間悟性論』（1690年）は、人間が感覚によってのみ知識を得ることができると主張し、自然主義的な教育論を明らかにしたJ. J. ルソーの『エミール』（1762年）は、人間が自然から学ぶことを教育とした。また、I. カントによれば合理主義の精神が無知や迷信から人間を解放して、遂には社会の一員として道徳的存在とさせるのであり、19世紀のH. スпенサーによれば科学のみが人間に有益な知識を提供しうる。このように、自然宗教、道徳、科学が神学を高等教育から追放しようとしてきた。この観点からすれば、神学大学に過去の遺物として以外の何が期待されるのであろうか。

（3）さらに、キリスト教の内部においても神学大学に対する懐疑的な態度が一部で見られることも事実であろう。大別すれば、神学教育には大学の神学部と神学校での二つの伝統がある。大学での神学教育は、ドイツやイギリスで見られるように、公性格の強い大学制度に基づくもので、しばしば教職資格の公認と結び付き、自由な学究の場としての大学からして、独創的で、時代や思想との関わりを重視し、アカデミズム偏重の傾向を持つ。神学校での神学教育は、欧米の自由教会の伝統に見るように、政教分離の原則に立ち、教會的・保守的性格が強いため、教職養成という狭い目標に視野を限定する傾向を持つ。すなわち神学校の伝統が大学神学部の伝統に対して抱いている懐疑と言ったものである。特に、福音主義や敬虔主義の流れにおいては、「福音と文化」あるいは「信仰と学問」をどちらかと言うと対立的に理解する宣教中心主義、また信仰を個人の内面性の領域とし、学問（時としては神学を含めて）や大学教育を外面的で反信仰的と見なす傾向があろう。さらに、日本のプロテスタント・キリスト教の歴史においては、いわゆるミッション・スクールが戦後多く新制

大学となり、教育、文化、そして宣教において成した貢献は実に大きいものがあるが、ミッション系大学における神学教育、信仰や神学のあり方に関しては消極的な評価を下すむきが少なからずあった。また、ミッション系大学の神学部がそれぞれの大学の発展の陰にあって閉鎖されて、今日五指で数えられるほどになったことを指摘する者もある。神学大学を問うことは時代錯誤的なことなのであろうか。

## 2. 「神学と大学」

(1) 「エルサレムとアテネと何の関わりあらんや」とは、確かに一つの視点であろう。しかし、それがすべてではない。ちなみに、パウロが言う「ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人（ギリシヤ人）にとっては愚か」である十字架の福音あるいはキリストこそ、視点を変えて、神の目からすれば、また、教会の信仰から見れば、「神の力、神の知恵」（Ⅰコリント1:23,24）である。使徒のこの論理の転換にこそ、大学都市タルソ出身のユダヤ人、ヘレニストでありながら、パリサイ派律法学者ガマリエルのもとで律法を学び、キリストに召されてからは異邦人への使徒となったパウロにおける神学の成立、ひいては「神学と大学」という観点が成立しうる基礎があったと言えないであろうか。「このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されている」（コロサイ2:3）のである。

事実、使徒たちの時代が幕を閉じた後の紀元2世紀から4世紀にかけてのキリスト教が取り組んだ重要課題の一つは教育であった。キリスト教が広まっていった地中海世界はギリシヤ文化を基調とするヘレニズム世界であり、そこでは、キリスト教のメッセージはあまりにも異質的であり、ユニークであった。例えば、神理解では、聖書の唯一神の教えに立ち、天地創造の唯一神以外はすべて偶像にすぎないと主張したため、政教一体で、家、村、町、国家それぞれの神々を祭っていた人々からは「無神論者」、「人類の敵」と非難された。歴史観でもユニークであり、天地創造から世の終りまでを一貫して神の支配と理解し、ヨハネ黙示録が明らかにしたように、大ローマ帝国はその罪のゆえに滅びるとすら見ていた。そして、何よりもユニークであったのは救済論、十字架の

メッセージであった。2世紀後半にキリスト教を最初に組織的に反駁したローマのプラトン主義哲学者ケルソスは、最古の反キリスト教文書『真正な教え』において、キリストの受肉、十字架、復活を柱とする福音の非合理性をあげ、*「キリスト教徒のみが十字架で処刑された罪人を神として礼拝する」*と皮肉ったのであった。このような反キリスト教的異教文化のヘレニズム世界に対して、キリスト教は単に対決するのみであったり、逃避するだけであったのではなく、積極的にそのような文化を学び、福音宣教や弁明のため利用した。

(2) W. W. イエーガーの著作『初期キリスト教とギリシヤの教育』(Early Christianity and Greek Paideia, 1961)は、キリスト教がヘレニズム世界でヘレニズム化されつつも、逆に、ヘレニズム文化をキリスト教化していった経緯を明らかにする。キリスト教のヘレニズム化のプロセスにおいて、教会が宣教と改宗者の育成のために用いた主要な手段は、ギリシヤ文化でいう「教育」、すなわちギリシヤ哲学の諸学派が行ったように自説こそが幸福・救いへの唯一の道であると説く方法である。さらに、キリスト教は福音の弁証においても教育を利用した。護教家と呼ばれるユスティノス、タティアノス、アレキサンドリアのクレメンス、アテナゴラス、テオフィロス、オリゲネス、テルトゥリアヌスなどはいずれもキリスト教の教理と高度なヘレニズムの学芸に精通した人物であり、彼らの弁証の作業を通して次第に神学が確立されていった。なかでも、アレキサンドリアの教理学校はクレメンスとオリゲネスという二人の著名な学者の指導を受けて、神学とヘレニズムの思想との高度な総合が試みられた。クレメンスの『ストロマティス(雑録)』のことは、「多くの支流がそこに流れ込むが、真理の川は一つである」は、彼ら護教家が異教の学問に対して抱いた情熱と共にキリスト教信仰における自信を窺わせる。

(3) コンスタンティヌス帝によるキリスト教の公認(ミラノ勅令, 313年)および4世紀末のテオドシウス1世による事実上のキリスト教国教化は、神学と異教の文化・学問との関係に大きな変化をもたらした。一方において、キリスト教はローマ皇帝が招集した教会会議(ニカイア会議, 325年からカルケドン会議, 451年まで)により、キリスト教神学の基本である正統的三位一体論およびキリスト二性一人格論を確立した。ニカイア信条は、本来奥義的である三

位一体の教理を、父と子に関してヘレニズム的な「ホモウシオス（同質）」という用語で表現している。他方において、神学の優位性にますます自信を深めたキリスト教は、聖書を解釈するための手段として、また、神学のための準備段階として異教の学問を位置付けるようになる。アウグスティヌスが「知らんがために信じ、信ぜんがために知る」（*Credo ut intelligam, intelligo ut credam*）と主張した時、キリスト教のみならず異教の哲学や宗教を含めた学問とキリスト教信仰との究極的調和を意味した。また、象徴的な事件ではあったが、529年東ローマ皇帝ユスティニアヌス1世が伝統あるアテネの新プラトン主義アカデミアを閉鎖したことは、異教の学問独自での存在が許されず、神学との関わりの必要を意味した。

西方キリスト教の中世において、キリスト教の学問はおもに主教座聖堂付の学校と修道院の二つの伝統によって維持され、発展を見た。特に、修道院の図書館に相当する「スクリプトリウム」（*scriptorium*）においては、修道士たちの際限のない労力により、聖書などのキリスト教文書のみならず、ギリシヤ・ローマの古典が筆写され保存された。7世紀スペインのセビーリャ主教イシドールスの主著『語源考』（*Etymologiae*）は、算数、幾何学、天文学、音楽などの基礎学から、医学、法学、歴史、神学、動物学など20の部門にわたり、ギリシヤ・ローマ古典およびキリスト教文書からの抜粋から成る当時の百科辞典であった。

12、13世紀に中世カトリック教会はその絶頂期を迎えた。この頃、これまで学問研究の担い手であった修道院に代わり、ヨーロッパの主要都市の聖堂付き学校と、医学や法学を専門として、医者や法律家を養成する専門学校が出現した。聖堂付き学校ではバリ、オルレアン、ウトレヒト、トレドなどが有名で、専門学校では医学のサレルノ、法学のボローニアが著名であった。これらの学校の中から、1200年前後にいわゆる中世の大学がバリ、モンペリエー、ボローニア、サレルノ、サラマンカ、リスボン、オックスフォード、ケンブリッジなどに誕生し、その数は1500年頃までに75を数えた。なかでも、教会との関係が密接で典型的なものはバリ大学であり、そこでは神学、法学（教会法）、医学の3上級部と下級の学芸学部が置かれた。

これらの大学は当初「一般的な学問の場」（*studia generalia*）として知られ、後に今日の大学という言葉の語源ともなった「ユニベルシタス」（*universitas*）

が用いられ、商業ギルドとか外国の町にある同郷人ギルドの例にならって、教師あるいは学生が結ぶ団体を意味するようになった。「神学と大学」のテーマに関して言えば、ユニベルシタスというラテン語が「全体」とか「総合」を意味するように、大学での学問は教会の神学を中心とした一大総合学であったことである。

この頃、教会建築ではゴシック様式が盛んとなり、丸みと重厚さが特徴であるが、技術面で高さや広さに制限があった、これまでのロマネスク様式に取って代った。天井のリブ・ヴォールトや外壁部の飛控えなどの技術革新により、ゴシック様式は内部の大空間や天井にそびえる尖頭アーチを可能にし、絶頂期を迎えた教会の天にそびえるばかりの力の象徴となった。同様に、ユニベルシタスにおいても、すべての学問を総合して天にまで届けようとする教会のエネルギーが、膨大な過去の知識を集大成し、ゴシックの大聖堂のように調和させる学問の場であった。ちなみに、この大学の世界で、当代随一の神学者トマス・アクイナスはアリストテレスの哲学とキリスト教神学を調和しようとして、理性と信仰、自然と恩恵というように下から上に積み上げられた二階建ての建物のような世界観を築き上げた。すべての学問が当然のこととして神の栄光、教会の名誉のために位置付けられた。象徴的なことは、アクイナスの主著『神学大全』(Summa theologiae)のスンマは「至高」と「完全」を意味することばであるが、絶対的な真理を論ずる神学を中心として、哲学や諸学を一つの体系にまとめ上げようとしたこの書物が、「筆を起こせ」という神の幻を受けて、神論、創造論、人間論、キリスト論と書き進められ、「筆を折れ」とのもう一つの幻により、最終部の秘跡論と終末論は未完で残されたことであった。

(4) 教育の領域に関する限り、16世紀の宗教改革はそれに先立つ中世末期のルネッサンス(文芸復興)運動の一環として位置付けられる。神と教会中心の中世のスコラ学に対するものとして、ルネッサンスはギリシヤ・ローマ古典の復興に始まり、聖書そのものや教会教父などのキリスト教古典の研究までおよぶ新学問を生み出した。ルネッサンスの精神はフマニスム(人文主義)であり、新しい学問の根底には聖書の人間観というよりは、ギリシヤ・ローマの古典が讃えた理想的な人間観、神学や教会に拘束されずに人間の自由な知的、身体的、社会的発展を認める人間観があった。そこで、ルネッサンス・フマニス

ムは古い権威主義的な神学や堕落の中で自己改革のできない教会に対する批判的な精神を培うことになった。

「神学と大学」のテーマに関して言えば、ルネッサンスは神学中心の大学に対する改革運動であった。それは、ルネッサンスが哲学や科学の分野での新学問であると言うよりは、文法とか修辭学などの分野での新学問であったため、人間に関する基礎的学問を神学のための手段、準備段階と見なすのではなく、その学問独自のメリットにより学ぶ姿勢であった。そして、宗教改革者たちがこの姿勢をもって、古典としての聖書のギリシヤ語やヘブル語による研究を進めた結果、カトリック教会に反対する神学、教会、大学を導き出すこととなった。この点で、当時言い古されたことは「(人文主義者の) エラスムスが卵を産んで、(宗教改革者の) ルターがひなにかえした」は妥当なものであった。

しかし、その反面、宗教改革はルネッサンス・フマニズムとは本質を異にする精神に基づく運動でもあった。エラスムスと同じ方法で聖書を研究したルターが到達したのは、カトリック教会やエラスムスとは異なった救済論、すなわち、信仰義認の教えであった。さらに、宗教改革がその形式原理として「ただ聖書のみ」、実質原理として「ただ信仰のみ」、目的原理として「ただ神にのみ栄光を」と主張して進んだ時、それはルネッサンス・フマニズムとも異った精神を形成し、理性に基づく整合性を主張することよりも、聖書にいかに忠実であるかを問う学問を形成した。ルターが「アリストテレス抜きでなければ、神学者になれない」と言ったことが想起されよう。

こうして、「神学と大学」の新しい関係がプロテスタント宗教改革の原則に基づいて形成された。特に、ルターのヴィッテンベルク大学の若い同僚メランヒトンは大学改革に大きく貢献し、宗教改革の精神と古典的人文主義との統一をはかった。42年間ヴィッテンベルク大学に在職したメランヒトンは、プロテスタント諸大学とギムナジウムの最高指導者として活躍し、マールブルク大学、ケーニヒスベルク大学などの新設に関与し、既設校ではヴィッテンベルク、エルフルト、チュービンゲン、ハイデルベルク、バーゼル、ライプツヒ、フランクフルト、コペンハーゲン、ウプサラの大学の改革を行った。これらの大学における基本的教育理念は神学と人文学との統合であり、実質的には教職者の養成とプロテスタント神学の弁証であった。これ以降、ルター派の伝統では大学が国家の制度としての性格と、特に神学部は公的教職養成機関とし



ての性格を強く持つこととなった。

他方、ツヴィングリ、ブツァー、カルヴァンのリフォームドの伝統は、大学での教育における知的明瞭さ、敬虔さ、国家・社会との関わりの三点を強調したもので、学問の実践的な適用に大きな関心が払われた。ジュネーブやフランス、オランダ、スコットランドの大学や16世紀最大の教育者と言われるJ. シュトゥルムが始め、ブツァーとメランヒトンの影響を受けて古典とキリスト教の敬虔さを調和することを目指した高等学院においてこれらの特長ある教育が行われた。特に第三の強調点に関しては、『聖徒の革命』(The Revolution of the Saints, 1965)の著者M. ウォルツァーが明らかにするように、カルヴァン主義者が近世の政治史の中で初めて政治思想の力点を君主から聖徒(信仰者)に移し、聖徒に動機付けをし、彼らを組織化することにより政治力とした。ジュネーブの市民であれ、フランスのユグノーであれ、オランダの改革派やスコットランドの長老派であれ、社会参与や政治改革をそれぞれの召命ととらえ、良心に従ってその遂行に当った。「神学と大学」との関わりは、信徒、教職の区別を問わず、神の聖なる王国(holy commonwealth)実現という目的において一つに調和したと言えよう。

(5) 近世に入ったヨーロッパにおいて、「神学と大学」の関係は中世や宗教改革の時代とは大きく異なったものとなり、神学と大学は次第に二極に分れるようになった。神学はキリスト教固有のもの、普遍妥当なものであるよりは特殊な学問であると見なされる反面、大学の方は自然科学の新しい発見によりますます広がって行く人間の知識全般を扱う学府と見なされた。しかも、大学は時代の風や思想の波を受けて世俗化の一途をたどるにいたった。とりわけ、自然主義、合理主義、国家(民族)主義からの波風は「神学と大学」の関係に根本的变化をもたらした。

近世哲学の祖と呼ばれるデカルトの「我思う、ゆえに我あり」は、神、教会、神学から独立した人間の自我の主張であった。真理に至るための手段であるならば、神の存在をすら疑うことのできる人間にとって、どうしても疑うことのできない事実、すなわち、疑っている自己の存在、これを真理探究の基礎に据えた。神抜きで、神学の枠付けから解放された自我こそが大学の主人公となるのである。そこから自然主義や合理主義へはあと一步の距離であった。

18世紀の自然主義者は、冒頭で触れたJ. ロックの感覚のみによる知識の可能性という考えに基づき、神学が問題とするような超自然を非存在あるいは不可知存在と見なし、それが人間の実際生活にほとんど意味を持たないとした。この主張の根底には性善説があり、自然の状態における人間の自己充足性の主張があった。ルソーの著作『エミール』がこの主張を明らかにし、ルソーの愛読書の一つがD. デフォウの『ロビンソン・クルーソーの冒険』(1719年)であったこともうなずける。自然人の自由な生き方から、経験や感情を通して、国家、社会、職業、教会について人間は学んで行く。超自然の啓示に基礎を置き、前提的な神学は、自然および自然の学びであるべき大学と対局にあるため、両者の関係は対立以外成立しないのである。

合理主義は18世紀の啓蒙主義時代以来、世界を、また教育を支配している思想である。「啓蒙」のことが明らかにするように、無知や迷信などを理性の光に照らして除去し、人間をそのあるべき姿に解放するという主張である。信仰とか神学はしばしば「無知や迷信」のカテゴリーに入れられ、感性に属するものとして本質的に悟性に劣るものと見なされた。I. カントによれば、教育は人間に自由な存在としていかに生きるかを教え、社会の一員としての人間を道徳的存在とするか、を課題とする。宗教に関して言えば、キリスト教の神学や教理は偏屈なものとされ、合理主義が容認しうるものとしては、ある神の存在、その神が善を勧め悪をこらしめること、死後の世界などの提題から成る理神論で充分とされた。このような合理主義は、19および20世紀においては科学的合理主義と装いを新たに、現代の世界の高等教育を支配している。19世紀前半に、ルソーやベスタロツィの自然主義を科学的教育学にまで発展させたJ. F. ヘルバルトは教育を、心理学と科学的方法により知識を道徳的品性の陶冶に転嫁するプロセスと見なした。神学や宗教は言うに及ばず、感情や情熱までもが、冷静で合理的な科学的知識に取って代えられるのである。

そして、合理主義が行き着いたところがフランス革命に見られた近代国家の誕生と国家・民族主義の台頭であった。フランス革命においては、国家理性の神格化である「祖国」が「最高存在」としてカトリック教に代るものとして礼拝の対象とされた。また、近代国家に不可欠なものとしてフランス革命が導入したものに国民教育の理念があった。従来、教育は教会、王侯、両親の責任と想われてきたが、それを国家が教育の主体となり、国家のために役立つ人材を

教育する権利を有すると主張したのであった。教会立の学校に対抗して革命政府が導入した国民学校制度は、一方で教育の普及に大きく貢献したが、他方で自由・独立の気風が強い大学をも国民学校制度の延長線上に位置付け、国家目的のため利用するにいたる。19世紀前半のドイツの大学で論争された対立、すなわち、大学の自由は国家が認める範囲内での自由（F. D. E. シュライエルマッハー）か、ベルリン大学創設に参加したW. フンボルトが主張するように、国家は大学に必要な外的手段を提供し、大学の内面的活動には不干渉であることが大学の自由を守ることであるのか、はこれ以降の大学と国家の関係で常に問われるものとなった。

（6）さて、日本に近代的教育制度、とりわけ大学制度が導入されたのは、19世紀も後半の明治維新とそれを契機に出発した明治国家においてであった。まず、王政復古を果たした維新政府は、天皇を頂点にいただく神道国家主義に基づき、祭政一致政策を打ち出した。事実、1871（明治4）年に文部省が設置され、翌年8月には学制発布を行い、近代的な教育の導入に踏み切ったが、その直後の10月、従来、神道布教のために設けられていた神祇省が改名した教部省が文部省と合併した。これは、明治国家の教育政策と宗教政策とは表裏一体であることを意味した。当然、そこではヨーロッパのキリスト教の伝統で長く問題とされて来た「神学と大学」という意識が十分育つことがなかった。

さらに、切支丹禁制の高札が取りはらわれ、プロテスタント・キリスト教の布教活動が進み、その一環として推進された教育への参与の結果、ミッション系の学校が増えた。当然、そこにも国家のための教育という国家主義の枠がはめられることになる。ちなみに、今から100年前、新島襄は京都にキリスト教大学を設置しようとして血のにじむような努力をしたと言われる。彼は設置の趣旨を説いて、

「今、私が大学を起そうとするのは、この日本を、外人の手に渡したくないからです。いきいきと生命にみち、真理を愛し、自由を愛し、徳義を重んじて、この日本のために身命をなげうって働く政治家、実業家、文学者、宗教家を養成して、日本をほんとうの独立国とするには、大学を起こさなくてはだめです。大学を起こして、キリスト教主義の高等教育をほどこし、日本人

の智徳を、もっと、もっと高めなければならないのです」(神田哲雄『新島襄の生涯』(1955), p.147)

と訴えた。愛国者新島のこのことばは、戦前のキリスト教教育の方向性を象徴していたと言えよう。このような状況の中で、神学教育は前進し、大学の神学部の設置も見たのではあるが、「神学と大学」という問題意識はどれ程確立されたのであろうか。

皮肉なことは、キリスト教会にとって名実共に神学大学の実現と「神学と大学」意識にとって新時代を告げたのは太平洋戦争に敗れたことであった。敗戦の年の秋、文部省訓令第8号が出された。それは、

「明治32年の訓令12号は廃止する。学則に明記した上での私立学校における特定の宗派の教育、儀式は、これを認める」

と言うものであった。新憲法の発布、教育基本法の制定と続く中で、大学の自治、学問の自由も前進した。私立学校の躍進に歩調を合わせるように、ミッションスクールも次々と大学となり、また、神学部も新たに設置されるようになった。ここに、「神学と大学」の関係、あるいは神学大学の理念にとっての重要な歴史的実験の時を迎えたといえよう。

戦後45年の間に神学大学の理念がどのように変遷したかをここで言及することはできない。しかし、1970年代に起きた、ある神学大学における機動隊導入をめぐる紛争、あるミッション系大学における文学部神学科の閉鎖をめぐる紛争、いくつかの神学部の廃部などに見られるように、課題を多く残したものであったように思える。明治の時代に、東京帝国大学教授井上哲次郎が、キリスト教は教育勅語の精神に合わないとして引き起こした、いわゆる「教育と宗教の衝突」論争以来、教会の神学は、まず、国家、そして戦後は、大学との関係で本質的な問題を投げ掛けられて来た。そして、今日「神学と大学」の問題をどのように考えれば良いのであろうか。

### 3. 「神学大学の理念に向けて」

東京基督教大学（TCU）は、神学科と国際キリスト教学科とを併置して、神学部単一の神学大学として去る1990年4月に新設された。そこで、次の三つの間が設定されよう。第一は、神学大学とは「何か」（本質）、第二は、それが「なぜ」必要であるのか（必然性）、第三は、それが必要であったとしても、「なんのために」あるのか（使命）、である。第一の本質論については、本稿はその予備的考察に過ぎないため、今後の課題として残すが、第二と第三の間に関しては以下で簡明に言及する。

（1）文部省に提出したTCUの「設置認可申請書」には、設置の趣旨が次の要点で述べられている。まず、学内の状況として、1980年の三校合同により、それまでの東京基督教短期大学の外に、共立女子聖書学院と東京基督神学校が東京キリスト教学園に加えられ、大学設置に向けての学園内の準備が整ったことが述べられた。次に、学園を取りまく国内外の状況として、次のような文章が続く。

「近年、日本の発展は目覚ましく、国際社会における日本の地位も高まり、それに伴って世界とりわけ近隣のアジア諸国に対する日本の責任も強く意識されるようになってまいりました。国際化が進展する中で、日本の高等教育機関に関しても、世界的視野に立った人類の平和と繁栄、地球上の様々な問題の解決に積極的に貢献することが求められ、日本の伝統、文化を理解し、国際社会の一員として日本の内外で働くことができる国際人の養成が望まれています。また、キリスト教会においても、アジア諸国をはじめ世界各地において、日本のキリスト教会の積極的な交流と協力が期待されています。」

「本学園の精神的背景であるキリスト教は、世界宗教として約二千年の歴史を刻み、キリスト教信仰の宣教と隣人や社会への奉仕という二つの働きを通して、キリスト教神学の確立、国際的な文化や精神の形成、ひいては世界平和のために少なからざる貢献をしてまいりました。キリスト教にとって、これら二つの働きはいわば、互いに助け合う車の両輪であります。とりわけ、

人種、信条、文化を超えた愛の精神に基づくところの奉仕の働きは神学の学びを基調として生み出されるものであり、今日の国際化社会において異文化間の意志の疎通、異民族間の交流や和解などに貢献できるものが大きいと思われまふ。

(2) このように、TCUは伝統的な神学科に新しい試みである国際キリスト教学科を「抱き合わせ」にしている。神の啓示である聖書に基礎を置く神学と、どちらかと言うと新しい学問の分野であり、社会科学の方法論によって成立する国際関係論や国際文化論を学ぶ国際キリスト教学科を一つの神学部の中でどのように調和するか、といった内部課題に直面している。

さらに、神学大学の必然性は新大学のモットーである「キリストがすべてであり、すべてのうちにおられる」(コロサイ3:11)に照して考えられよう。パウロは直前の2章で「このキリストのうちには、知恵と知識との宝がすべて隠されている」と言う。このような意味で「キリストがすべて」であるのなら、そこに神学大学の必然性の根拠があろう。すなわち、今日世界を支配している学問の圧倒的な力を前にして、また、大学制度の中で、一般教育、神学、国際関係、国際文化の諸学をキリスト教の世界観という視座から取り組み、「キリストがすべて」とする学問の樹立を目指す方向である。さらに、「キリストがすべてのうちにおられる」というキリストの世界における遍在の事実から、宣教、国際関係、奉仕を見ながら、国際キリスト教学科を神学部に位置づけることである。

(3) 神学大学の使命については、これまで折りに触れて言及したことであり、二・三の点に限定する。

まず、第一点は、日本における福音主義に立つ神学大学の存在の意義を追求したい。「福音と文化」、「コンテクスチュアリゼーション」というテーマに福音主義も取り組み始めている。2,000年の歴史を持つキリスト教にとって、しかも歴史的、正統的な信仰を継承する福音主義の神学大学として、この課題は大きなチャレンジである。先に触れた新島襄は、彼の理想とする大学が実現するのに何年かかるか、と勝海舟に問われ、言下に「200年はいかかると思ひます」と答え、勝海舟の理解を得たと言われる。プロテスタント史の第二世紀にある

日本のキリスト教にとって示唆に富んだことばである。

第二点は、神学大学の使命は日本の教会が急務とするところであって、一刻の猶予も許されないことである。人口の1%にすぎないキリスト者が、99%の同胞に対する宣教と奉仕の責任を厳しく認識し、そのための働き人の養成に当ることである。世界宣教という学園のヴィジョンからすれば事態はさらに深刻である。最新の宣教学関係の著作（T. Yamamori, *God's New Envoys*, 1987）は、21世紀の初めには、世界の非クリスチャン人口の83%が、伝統的な宣教方策に対して門戸を閉ざした国々に住んでいると推定している。このため、新しい宣教の神学や方策が生まれる必要があろう。神学大学にとって気の遠くなるようなチャレンジを前にして、安藤伸市前理事長のヴィジョンは先駆的であろう。

「大アジアには世界人口の65%が存在している。アジアにおいては、キリスト教は少数派に過ぎない。日本がアジアの一員であることを弁え、アジア宣教を世界宣教の中心的課題ととらえるべきである。しかも、アジアの多くの国々には、例えば、医療、農業、国際関係などの奉仕者として入国し、奉仕を通して宣教の働きにあたることが必要となる。格別、アジア諸国に対してはかつての侵略者であった我が国は特別の負債を負っている。……このような宣教師、奉仕者を多く輩出し、アジアへの犠牲的な務めを果たさなければならない。」

第三点として、新大学のロゴ・マークの解説を引用して、この拙稿を閉じることにする。

「このロゴの中心には、円で描かれた地球・世界がある。そして、その円は完結されたものではなく、破れたもの、未完成であり、この世界の現状を象徴している。その円の上部には、ギリシヤ語のX（キー）とP（ロー）を組み合わせたキリストを象徴する文字がある。このキリストの象徴は円を突き破り、「キリストがすべて」とあるように、この世界に対する勝利者であり、また、完成者と位置づけられる。同時に、このキリストは全く円の上にあるのではなく、「キリストがすべてのうちにおられる」とあるように、世界の中にとどまり、世界の破れを補い、癒す救い主としても位置づけられてい

る。ここに、世界宣教の大ヴィジョンのもとに、みことばの宣教と研鑽、みことばに基づいて愛の奉仕と癒しにたずさわる人々を養成したいという新大学の使命が表明されている。そして、キリストの下にある開かれた聖書は新大学の福音主義の立場を明らかにし、その誤りない聖書のもとにTCUが位置づけられることを示している。背景にある信仰の大盾（エペソ6:16）に相應しく、新大学が信仰により前進して行きたく願う。」

〔歴史神学 専攻〕